

中上健次「隆男と美津子」を教材として読む

吉野樹紀

I

優れた文学の言葉は一義的な解釈を拒み、重層的な意味決定を強いるものである。文学を読むことは、「私」に伝えられる言葉には光と影の両面があることを教えてくれる。多義的な言葉をとおして物事に光と影があることを知ることによって、私たちは喜びや悲しみに満ちたこの世界を、彩りをもって感じるができるだろう。「つたえあう言葉」を育てるという言語観に基づいて、明確に伝達する言葉を育てようとすることは、確かに重要なことではある。だが、一義的な言葉は明確ではあるが、その明確さは、往々にして現実の生々しさを隠蔽し、現実をのっぺらぼうのようにしてしか私たちに示してはくれない。文学を読むことの重要性は、そうした言葉の重層性を身をもって体験するところにあるといえよう。

本稿では、まだ教科書に採られていないテキストを教材として発掘する作業をしているときに出会った（注一）、中上健次の「隆男と美津子」について論述する。このテキストは、はじめ『文藝首都』（昭和四十年十二月一日発行 第三十五卷第十二号）に「遠い夏」という題で発表された。後に、「隆男と美津子」と改題されて、作品集『十八歳、海へ』に収録されたが、その際に大幅に改稿されている（注二）。この改稿で、不用意な描写や説明、言葉遣いのこなれていない箇所が改められることによって、一義的な意味決定

を拒むテキストの言葉が、読む者を不安に陥れる、より完成度の高いテキストとなっている。

色あせた南の地方の海の写真を眺めるたびに、「僕」は死んだ二人の友達のことを思い出す。去年、「僕」は十八歳、予備校に通う浪人生だった。「僕」は予備校の授業を放棄してモダンジャズ喫茶「トーム」へ行く。「トーム」には隆男と美津子が入りびたっている。二人はいつもここでハイミナルを飲んでいたので。「僕」は彼らから「ボス」と呼ばれている。隆男は「僕」の親友である。だが、「僕」は美津子とも肉体関係を持ったことがあった。隆男が親からの仕送りを止められたため、二人は仕事を探しており、「僕」に何か適当な仕事はないかと尋ねる。しかし、仕事といってもこれといってイメージは浮かばなかった。

三週間ぶりに二人に会ったとき、「僕」は「心中未遂業」という仕事をみつけたと知らされる。二人はすでに「心中未遂業」を一回開業して五万円儲けたというのである。隆男の語る心中未遂業とは——助平などこかの重役だという男をつかまえて美津子を口説かせる。その後、隆男と美津子は新大久保の連れ込み旅館にはいり、何も書いてない新しい手帳に男のホテルの電話番号だけを書いて、致死量すれすれの睡眠薬を飲んで「心中」する。手帳の電話番号を元に呼び出された男は、自分が美津子を口説いたために二人が心中を凶つたのだと思い、入院費を払った上に、二人の更生にと五万円くれたのである。

心中未遂業の手口を楽しそうに語り、五十万円ぐらいたまったら南の島へ行って遊びくらそうかという隆男であったが、その後隆男と美津子は本当に心中してしまう。「僕」のニックネームと電話番号以外何も書かれていない手帳を残して——これが、このテキストのあらすじである。

ドラックや性が描かれていることもあり、このテキストが教科書の教材として採用されることはまずないだろう。雑誌『文學界』の「漱石・鷗外の消えた『国語教科書』」という特集（注三）で、「小学校から高校

までの国語教科書に入れたらいいと思う作家や作品をあげて下さい」というアンケートに答えた人の中にも、このテキストを挙げた人はいなかった。しかし、高校生と同世代の十八歳という若者が主人公で、友達・性・死、そしてドロップアウトした若者という、高校生にも関心の深い題材をあつかったこのテキストは、きつと彼らに強いインパクトを与えるであろう。

II

ここでは、まず高校生の感想文を検討する（注四）。若者の言葉遣いを用いた若々しい文体で語られ、ストーリーの展開も劇的で、一見生徒にとつても親しみやすいようにもみえるが、実際には相当に難解なテキストであるため、テキストの細部にまで目を配った感想文は少なかった。それでも、生徒がこのテキストのどこに着目するかについて、いくつかの傾向をみることができる。

まず、目につくのは、僕・隆男・美津子の三人の関係に着目したものである。

A 隆男も美津子も「ボス」を親たっていたようだけれど、本当はしつとしていたんではないだろうか。

ヘトームへに来る仲間のようなものだけれど、「ボス」は大学まだいってないものの大学に入ろうとしている人間で、隆男と美津子は仕事をしているわけでも学校行ってるわけでもない。それにこれから何になるわけでもなくヘトームへでラリっている。やる事、人生をちゃんと生きている人間へのしつとはあるのではないだろうか。（H・E）

B 友人が心中未遂業などというあぶない仕事をしているのに、主人公はなにもいわないのだろうか？ ふうなら、いくら致死量すれすれの睡眠薬をのんでいる友人がいれば、いつかは死んでしまうんじゃないかな

いかと思い、とめると思うけどな——。みんなバカじゃないの。(T・S)

C人間のきたない所とかが書いてあってけっこうおもしろい話だなあと思った。隆男と美津子の十八という年れいを感じさせない生活もけっこうおもしろかった。でもなんでこんなに普通にちかい、というより普通の主人公と隆男は友達なんだろう、すごいふしぎだなあと思った。(K・M)

こうした感想文の存在は、「先々のことなどどうでもよい。ケセラセラ、なるようになるさ」といいながらも予備校に通い続けている僕の日常の意識と、「ホーム」でラリって「俺なんかは社会の糞だからな」という隆男や美津子の日常の意識との違いを問うことの重要性を示している。それがまた、「親友」だという僕と隆男、美津子のお互いの人間関係を考えさせる際に関係してくるだろう。そして、僕と二人との関係の問題でも、特に大きな意味を持っているのは、僕が病院で警察官や院長に心中未遂業のことを話したことである。

Dなぜ「僕」は、隆男と美津子が何遍も心中を囚っていることを警察に言ったのか？ この時「僕」は、二人が本当に死んでしまったことを知らないのだから、二人が生きているなら心中未遂業のことを警察にバラしてしまったら、二人は警察につかまってしまうのに、どうして言ったのだろうか？ (H・A)

という疑問に端的に表れているが、このことは三人の人間関係を象徴的に示しているといえよう。最も多かったのが、二人が死んだ理由と、手帳に僕のニックネームと電話番号が書かれていたことの意味に着目したものである。

E結局、隆男と美津子は「自殺」をしたということだったのだろうか。彼らはなぜ自殺をしたのだろうか。

隆男の手帳にボスの電話番号が書いてあったのはボスに何かをうったえたかったのか？ それとも遺言

なのか？ 彼らはこの世の中に、人生につかれてしまったのだろうか。心中未遂業というのも、ただの作り話だったのだろうか。何が彼らを自殺にまで追いつめたのか？ 彼らの気持ちがよく分からない。

(T・A)

F 僕は「分からない……」と最後の方に書いてあったけれど、まったくその通りだと思う。隆男と美津子は何をボスにしてもらいたかったのか。「ボス」に五〇万円を出してもらいたかったのか。どうしてもその辺が分からなかった。だけど、隆男と美津子は恋人どうしだと思うのだが、ボスと美津子が「やって」た時のことを平然と語れているのではなく、その時の復讐を隆男と美津子の心中ではたしたとしたら……。そう考えると話があってくるのではないかと思うし、そうだとしたら二人は頭が良いと思う。話の内容的には、国語という教科にとりあげられにくいと思うけれど、すごく考えさせられるような難しい内容だと私は思いました。(Y・Y)

G 「隆男と美津子」を最初に読んで思った事は、隆男と美津子はやるなと思った。きっと隆男と美津子は「僕」をはめようとしたか、それとも、友達への最後の冗談だったのか、どちらかはわからないけど、どちらにしても隆男と美津子はおもしろいやつだなと思った。きっと「僕」にして見れば、親友が自分をはめるわけないとか、もしかしたら冗談なのかとか、いろいろ考えるところと思うけど、その部分をつかからないまま終わらせる所がすごい良いと思った。(S・R)

こうした、生徒の関心をふまえて、このテキストの読みを深めていく出発点として、次のような課題を設定することができるだろう。

- ① 隆男と美津子、そして僕はどのようにして毎日を送っていたか考えてみよう。
- ② 僕・隆男・美津子の間関係はどのようなものであったか整理してみよう。
- ③ 僕はなぜ心中未遂業のことを院長や警察官に話したのだろうか、考えてみよう。
- ④ ま新しい手帳に自分のニックネームと電話番号だけが書かれていたことを僕はどのように受けとったか、考えてみよう。

後にも述べるように、このテキストは謎解き小説ではないので、「二人が死んだ理由」や「手帳に僕のニックネームと電話番号だけが書いてあったことの意味」を明らかにすることはできない。そうではなく、こうしたことを「僕」がどのように受けとったかを問うことが必要であろう。そうすることによって、このテキスト全体におけるこれらの出来事の意味を重層的に示すことができる。それを意図したのが、④の設問である。

Ⅲ

このテキストには、一九六〇年代中ごろの青春が描かれている。恋人同士である隆男と美津子は隆男の家からの送金がなくなって困っている。隆男への仕送りをあてにしているところからすると、二人は一緒に暮らしているか、半同棲状態にあるのだろう。彼らは勉強も仕事もせず、モダンジャズ喫茶に入りびたり、ハイミナールにふける。ハイミナールとは睡眠薬の一つである。ハイミナール（ハイチャン）でラリって、ダシモ（モダン・ジャズ）に踊り狂い、放縦なセックスにふける（フリーセックス）というのが、六〇年代のある種の若者の風俗であった。

「ダンモへ行つてラリつてる時が最高さ。街の中をのたりのたりはいまわっている芋虫は知らねえんだ」
（「隆男と美津子」）

「俺なんか社会の糞だからな。何にもする気はないさ、糞みたいにくさくつて、鼻つままれてりゃいいさ」
（「隆男と美津子」）

という言葉に端的に示されているように、彼らは反社会的存在であることをアイデンティティとしながらも、同時に自分がドロップアウトしていることも意識している。自分がネガティブな存在であることを意識せざるをえない、その心の隙間にドラックや性が入り込んでいたのである。

現代の高校生においても、性やドラックは大きな問題となっている。だが、現在ではこうしたものが一種のファッションのように、軽い文化として彼らの中に入り込んでいるところに、現代の病理があるといえよう。現実のほうが小説よりも進んでしまっているのである。

一方、僕は予備校に通う受験生。だが、あまりまじめに勉強に専念しているわけではない。

僕は他の予備校生と同じように明年の試験に不安を感じていた。だが不安など嘘だ。どうでもよい。柔順な山羊の仔のような予備校生にもなれるし、予備校などいつやめてもよい。僕の一等好きな事は、ジャズを聴くことだった。今、ジャズばかり聴いていれば、先々のことなどどうでもよい。ケセラセラ、なるようになるさ。ならなければならぬでよい。（「隆男と美津子」）

といいながら、予備校の授業を放棄して「トーム」へ行く。「僕の一等好きな事は、ジャズを聴くことだった」とあるが、同時に僕は仲間を求めている。隆男は僕の親友だった。僕にとって仲間とか親友といえる存在は重要であり、浪人の僕が仲間を捜して徘徊するという心理が描かれているのである。

僕は隆男と美津子から「ボス」と呼ばれている。だが、同じ年齢の二人から浪人生にすぎない僕が「ボス」と呼ばれるのは不自然といえなくもない。

「隆男、今日も薬、のんだのか」僕は詰問するような口調で言った。（「隆男と美津子」）

というように、僕は隆男に詰問したり、「まじめに考えろよ」などとたしなめ、美津子からは適当な仕事がないか相談を持ちかけられているなど、二人の理解者のな存在であるようにみえる。ラリっばでドロップアウトした二人からすれば、大学へ行こうと勉強している僕は「ボス」のような存在といえるのかもしれない。だが、それだけではあまり説得力がない。初出である「遠い夏」には「僕は美津子と隆男に強くならなければ、仕事をしなければとよく注告していた」とある。いわば、僕は二人に前向きに生きることを説き、そうした僕を二人は「ボス」と呼んでいたことになる。そして、実際に美津子は僕に現実的な期待をかけて相談している。

美津子は僕の頭の中にも仕事のイメージがないのを知ると、いらいらしたような声で肩にもたれて眠っている隆男に「おきてよ」と云い、隆男の頭を揺った。（「遠い夏」）

期待をかけているから、僕に具体的なイメージがないのを知っていらいらするのである。しかし、「隆男と美津子」では、こうしたことはぼかされて、僕はともかく二人からボスと呼ばれているが、その理由になりそうなことは特に示されていない。そして、

僕は隆男たちに適当な仕事をみつけてやる能力に欠けている事を気づいた。僕は今春、高校を卒業し、大学の入学試験に失敗して予備校へ通う十八歳の少年にすぎなかったのだ……僕は恥じた。僕たちの間では暗黙の了解がある。他人の世界に干渉しないと云う約束を破ってしまい、そのうえ何もできなかった

た事を。(「遠い夏」)

という、自分が無力だといういわばあたりまえの意識も削除されている。僕が「仕事をしろ」と「注告」していたという前提があるならば、美津子が適当な仕事はないかと相談を持ちかけたことは、僕の「注告」に応えた現実的な効果を期待した行為として明確に位置づけることができる。だが、そのように描くことは、このテキストにおける出来事の意味を分かりやすくはあっても、同時に単線的なものとしてしまうだろう。自分は無力だという意識の記述も、この単線化を促進する。「隆男と美津子」では、そうした文脈を削除し、一介の予備校生にすぎない僕に仕事の相談をすることの意味を説明せずに宙吊りにすることによって、逆に多義的なメッセージ性を与えているのである。

また、「遠い夏」のこの部分には、「仲間」がいかにして成り立つかという問題が明示的に示されている。彼らのつきあいには「暗黙の了解」がある。それは、お互いに「他人の世界に干渉しないと云う約束」である。お互いにお互いの内部にまで立ち入らないところでの軽いつきあい、そこで彼らの「仲間」は成り立っている。だが、僕はそうした「約束」を破って「強くならなければ、仕事をしなければ」と「注告」していた。このことを、僕が隆男たちのことを思って、そうした表面的な軽いつきあいをこえた友人関係を結ぼうとしたものとみなすことはできないだろう。

柔順な山羊の仔のような予備校生になるのを僕は恐れていたが、他の予備校生と区別できる特徴を明確に持っているわけではなかった。だから社会に隷属してしまったような若者の群の一員として自分を定義づけるべきか、それともヘトームに集まる隆男たちのように社会からはみ出し疎外された、いわば反社会集団の一員とみなすべきか、僕には判断できかねた。(「遠い夏」)

とあるように、僕は隆男たちと同じになりきれないことを意識している。隆男たちに対する「注告」は、そうした別の世界からの「注告」であり、自分が傷つかないところとする第三者的な「注告」でしかなかった。僕が「恥じた」というのは、単に自分が何もできないのに「仕事をしろ」などと「注告」したことだけについていうのではなく、自分の「注告」のそうした欺瞞性を恥じたのである。

「隆男と美津子」では、こうした、隆男たちとの異質性を僕が意識している箇所が削除されている。僕は隆男たちとは異質な世界に住みながら、その異質性に無自覚なまま、あるいは異質性に目をそむけながらと、いつでも良いだろう、お互いを親友だと思い、「ボス」と呼ばれたり、忠告したりする関係を結んでいるのである。

「先々のことなどどうでもよい。ケセラセラ、なるようになるさ」といって勉強をさぼったり、悪ぶってジャズ喫茶に入りびたったりしながらも、予備校に通ったり、試験を受けたりする予備校生というのはよくある存在である。際だってまじめな受験生ではないにしても、Cの感想文にもあったように、ごく普通の若者である。「先々のことなどどうでもいい」と思っているから、隆男たちのような存在に共感するものもあるが、最終的には社会からドロップアウトしてしまった彼らとは違ったところにいる。だから、詰問したりもするのである。心中未遂業のことを得意げに語る隆男の言葉に「嫌悪」を抱きながらも、「リズムをとりながら、隆男に小さな笑いを返す」という微温的な態度を示す。その微温的態度そのものに僕と隆男たちとの間のミゾがあるのだが、僕はそのことにも気づいていない。

僕・隆男・美津子の人間関係を考えるに際して見逃すことのできないのが、美津子の存在である。三人の人間関係について、ある生徒は、

隆男と美津子はつきあってる。でも僕と美津子は体の関係がある。3人は親友。(K・N)

というように端的に説明している。この作品の舞台になった時代に、若者の間に「フリーセックス」と呼ばれた風俗があったことを念頭に置いたとしても、こうした関係を親友と呼ぶことが適切であるかどうか疑問が残るのだが、そのことに言及した生徒はあまり多くなかった。生徒にとってあまりリアリティの感じられない人間関係なのだろうか。だが、生徒の交友関係をみてみると、以前つきあっていたボーイフレンド(ガールフレンド)の友達といつのかつきあっているというケースも多くみられるので、それほど生徒の現実からかけはなれていても思われえない。逆に、よくあることなのでやりすごしてしまったという可能性も考えられる。もっとも、感想文といってもテキストのあらゆる点に言及できるわけではないので、他の点に印象深いものがあつて、こちらまで言及する余裕がなかったというのが、実際のところだろう。

僕が美津子と関係を持った経緯は、「遠い夏」では、

僕がまだ高校生だった頃、モダンジャズ喫茶(ホーム)に集まる仲間たちと、セックスについての愉快的な会話を楽しんでいて、まだ未経験者が僕だけだと知れた時、美津子が僕に教えてあげると云って彼女のアパートへ連れて行ってくれたのだった。アパートのドアを美津子が開けている時、体中がぎこちなく震え出したものだった。(「遠い夏」)

というように紹介されている。ここでは美津子がリードする側で、僕は受身の立場に立っている。美津子は積極的にかつ意志的に行動しているといえよう。こうした場面で受身の立場にあることを甘受した僕が「ボス」と呼ばれるのは不自然であるからか、このエピソードは「隆男と美津子」ではすべて削除されている。二人の関係は、仕事の話をしているときの、

「美津子がカラダ売りやあいい」と言った。「美津子はうまいぜ。なあ。ボスも知ってるだろう、このまえだって、俺がラリっている時、美津子とやったじゃないか」……「馬鹿じゃないよ。俺の前で、知らん顔して、二人でやって。後でぶったたいてやったんだからな」(「隆男と美津子」)

という隆男の言葉によって、その状況が暗示されるように改められている。だが、そのように書き換えたことの効果はそれだけではない。「遠い夏」のように、未経験者の僕に「教えてあげる」といつてアパートにつれていったというのは、いわば確信犯的な行動で、そこに偶然やなりゆき・迷いといった心の揺らぎの要素を想定することが難しい。行為の意味や目的が明確で単線的になりすぎるのである。後に述べることになるが、「隆男と美津子」のように書き換えることによって、美津子の行動が、他の行動と結びつきながら、美津子の心の揺らぎを想定する読みを可能にするといえよう。

前章で設定した課題②において、「僕」と「隆男と美津子」との関係を考えてとするのではなく、「僕・隆男・美津子」の三人の関係を問うとしたのは、恋人同士とはいえ隆男と美津子もまた同じにあつかうことはできないからである。

隆男も美津子もドロップアウトした存在であり、すでに述べたように、「仲間」だとはいいながらも僕とは異質な世界にいる。中学の時から「補導」される「トップ」だったという美津子はいわば筋金入りであるが、現在は隆男のほうがより墮ちている。僕に会うとき、隆男はいつも睡眠薬で朦朧とした状態でふらふらしており、

隆男が眼をさました。朦朧としている隆男に、美津子は「仕事の事を考えているのよ」と顔のそばに唇を持っていつて言う。隆男は美津子にキスをされるとでも思ったらしく、唇の間に舌をのぞかせて、顔

をつきだす。(「隆男と美津子」)

隆男はまたラリっていた。隆男はフラフラしながら立ち上がり、僕に抱きつき、「会いたかったなア、アイしてるんだよ」と言う……美津子の乳房に隆男は何のつもりか、手を置く。隆男の手は美津子に振り払われた。(「隆男と美津子」)

というように、おぼつかない状態にいる。一方、美津子は、

「朝、どうしたのよ？ 学校？ ずっと部屋に居た？ ボスのお家に二度も電話したよ」(「隆男と美津子」)

「私たち、仕事をしようと思って」……「もうお金もなくなっちゃってさ。隆男のうちからお金がなくなっただよ。それでボスに電話したよ。適当な仕事ないかなあと言おうと思ったのだけど、朝は居なかったでしょう」(「隆男と美津子」)

「ボスは勉強に忙しいんでしょ？ 私なんてさ、中学の時、いつもトップ。ただし補導されてさ」(「隆男と美津子」)

というように、さかんに僕に働きかけている。何か適当な仕事はないかと持ちかけるなど、美津子は現状の打開策を模索しているといえよう。隆男と一緒にいながらも一緒になりきれないでいる。このように考えると、美津子が僕と関係を持ったことも、単にフリーセックスだとか、未経験の僕に教えてあげたということではなく、美津子の心の揺らぎとして読むことができるだろう。

いうまでもなく、隆男は美津子が好きである。しかし美津子の心は微妙に読むことができる。美津子ももちろん隆男が好きである。だが、その隆男は頼りない。そして今の状態から離脱したいと思っている。その

思いのよりつく存在が僕であり、そのことが美津子に僕と関係を持たせるきっかけになった。僕と美津子が関係を持ったとき、「僕を誘ったのは美津子だったのだ」とあるが、それ以外にも美津子は僕に様々なメッセージを発しているのである。だが、僕は美津子のそのメッセージを受けとめていない。そして、頼りないとはいえ隆男にも魅力があり、捨てきれない。美津子からすれば、彼女の心は隆男と僕の二人の間で引き裂かれているといえよう。

隆男にしても、そうした美津子の心の揺らぎを何となく感じざるをえない。

「美津子がカラダ売りゃあいい」と言った。「美津子はうまいぜ。なあ。ボスも知ってるだろう、このまえだつて、俺がラリっている時、美津子とやったじゃないか」……「馬鹿じゃないよ。俺の前で、知らん顔して、二人でやつて。後でぶつたたいでやつたんだからな」(「隆男と美津子」)

というように隆男が、美津子と僕の間をあげすけになじつたり苛立ちを隠さないのは、そうした美津子の心の揺らぎを敏感に感じ取っているからにはかならない。それは単に、「浮気っぽい」美津子への苛立ちと、いうように矮小化して考えるべきものではないだろう。

「こいつほんとに、おれの首しめた事あるんだ。おれがぶつたたいたら、おまえみたいなやつ、殺してやるって、何回も何回も首しめるよ。ボス、こいつ、ちよつとおかしいから」……「本当じゃないか。何回も、死にたいなら殺してやる、つて首しめるじゃないか」(「隆男と美津子」)

これは、心中未遂業のことを話すときの隆男の言葉である。隆男が美津子のことを「ぶつたたいた」ら、美津子が「おまえみたいなやつ、殺してやる」といって隆男の首をしめたという。これも恋人同士の痴話喧嘩というよりも、隆男の苛立ちと、現状から脱出したいという気持ちをもてあましている美津子の思いの、出

口のないぶつかりあいとみなすべきだろう。

美津子が僕に向けるメッセージは、その他にも何度となく示されている。

「私たち、仕事をしようと思って」美津子は僕の顔をまばたきもしないで見つめて言った。（「隆男と美津子」）

「仕事って言ってもなあ……」言葉にしてみても、イメージは浮かばない。美津子は僕の顔を見つめている。（「隆男と美津子」）

ヘトームは次第に混んできた。煙草のけむりが、石灰のように白く、僕たちの座席の周囲にただよった。美津子は隆男の頭を肩に置き、僕の顔をじっと見つめている。美津子は、大柄なため、二十四、五に見える。白と赤のストライプの服は、乳房の形にふくらみ、乳首が眼につく。（「隆男と美津子」）

三つめの引用は、隆男が僕に心中未遂業のことを話したすぐあとの場面である。二人で心中未遂業を始めた、その隆男と一緒にいながら僕の顔をじっと見つめる美津子。ここには美津子が僕を見つめていることに気がついていて語り手がいる。だが、読み手は、僕に密着して読んでいる間は、そのメッセージが分からないだろう。僕自身が、美津子のメッセージに気づいていないのと同じように。この箇所は「遠い夏」では、

ヘトームは次第に混んできた。煙草のけむりが、石灰のように白く、僕たちの座席の周囲にただよった。美津子は隆男の手をにぎりしめながら、涙ぐんでいるように見えた。（「遠い夏」）

とある。「涙ぐんでいる」ように見える美津子ではなく、「僕の顔をじっと見つめている」美津子の視線に、より強いメッセージが込められているといえよう。

心中未遂業のことを聞かされた僕は、「リズムをとりながら、隆男に小さな笑いを返す」という微温的な

態度を取りながら、二人を心配するでもなく、

五十万円を手に入れるには、あと十回は心中しなければならぬだろう……何回も何回も二人で死ぬ、
と思った。（「隆男と美津子」）

と思う。僕が隆男たちと仲間で親友だと自分でも思いながら、究極的には同じではありえない僕の姿がここに表れている。だが、僕のこの態度は僕の異質さを示しているだけでなく、僕が美津子のメッセージに気づかないでいるミゾの深さを示している。と同時に、美津子の「白と赤のストライプの服は、乳房の形にふくらみ、乳首が眼につく」というところに目が惹きつけられる僕は、性的な魅力にあふれた美津子と「何回も死」ねる関係にあることに嫉妬してもいるのである。この嫉妬の感情は、僕と二人の間にミゾがあることと矛盾はしない。「隆男の頭を肩に置き、僕の顔をじつと見つめている」美津子は、分かろうとしない僕の鈍感さをじつとみつめているのである。

このテキストにおける僕・隆男・美津子の関係は、一義的に規定できるものではなく、こうしてみてきたさまざまな視点からの意味づけがせめぎあっているといえよう。

IV

病院で心中未遂業のことを話したとき、僕はまだ二人が生きていると思っていた。もし僕が二人と同じ世界を共有しているならば、心中未遂業のことをそのようなしかたで話したりはしなかっただろう。それを簡単に話してしまうところに僕たちの人間関係が表れている。僕がなぜ心中未遂業のことを院長や警察官に話したのか、という問いは、まさに僕のポジションを問うものなのである。

「どうでもいい」といいながらも予備校に通い、試験を受けたり大学へ行こうとしている僕は、いわば体制の側に入ろうとしている人間である。体制の側に入ろうとするから、「注告」や説教をしたりもするのであるが、同時に、体制の象徴である警察がくると自分は疑われないようにと喋ってしまふ。それはいつてみれば裏切り行為でもあるが、

「僕はそんな事、知ってますよ。心中を凶ったことぐらい。何遍もやってるんだから、隆男たちの仕事なんだ」……「どうってことないですよ」再び僕は言った。（「隆男と美津子」）

というように、まず自分は無関係だということアピールして、隆男たちの心配もしていない。ここで、僕は隆男たちのことを「知ってますよ」といつている。自分が隆男たちのことを分かっていると思いつている点に注意したい。僕は隆男たちの仲間で親友だから、友達のことを分かっていると思いつている。

このような、お互いにわかつたつもりでいる関係は高校生の友人関係にも多いはずだ。分かつたつもりでいるのと、本当に分かつていることとは違ふ。もちろん、本当に分かることなどではしない。それを分かっていると思うのは欺瞞であろう。それはあくまで幻想でしかないが、分からないことを自覚しつつ理解しあおうとするところに、真の理解に向かう道が開けているのかもしれない。

この場面で、僕は分かつていないことに気づかず、分かっていると思いつ、それでいて隆男たちの心中未遂業のことを話してしまふ。そして美津子のメッセージに気づかない鈍感さ。隆男と美津子の死、そして手帳に記された僕のニックネームと電話番号によって撃たれているのは、そうした僕の足元の定まらなさなのである。

僕が心中未遂業のことを話した箇所は、「遠い夏」では、こうした位置づけとはまったく違つたものとし

て描かれている。

「僕はそんな事、知ってますよ。心中を凶ったことぐらい、隆男たちの仕事なんだ。危険な仕事なんだ。誰にも真似のできない」「なんだって」僕は院長と警察官の驚きに満足して口をとじた。そうなんだ、誰にも真似のできない仕事なんだ。他者の眼には、みじめたらしくしてしまわれた、人の善意を傷つけ引き裂く仕事かもしれないが、僕たちへ社会の糞へに属する者の眼には勇敢なきらきらと輝くイメージをもつ八方破れの仕事にみえるはずだ。（「遠い夏」）

というように、僕は隆男達の心中未遂業に共感をもって、英雄的な行為のように受けとめている。西村病院の院長室に通されたとき、僕が感じた「小さかったが、きちんとした安定感があった」と感じた院長室は、ゆるがない、いわば「体制」的なものの象徴といえよう。その院長室の中で、僕は啖呵をきるようにして心中未遂業のことを語る。ここで僕は、自分たちを「僕たちへ社会の糞へに属する者」といつている。だが、この感覚は、自分を隆男たちと同じ仲間だと実感してそういったものではない。別のところで、

社会の糞、おつにすまして食事する日本と云う社会の糞、隆男たちだけではあるまい。僕もそうだ。あの歩きながら英単語をみみずのようなひだをもつ脳細胞に印づけようとしている予備校生たちもそうだ。現代の若者はみんなそうかも知れない。（「遠い夏」）

といつているが。たぶん大人の社会を想定した「おつにすまして食事する日本と云う社会」が体制的なものを象徴するとすると、それに対する若者はみんな「社会の糞」だというのである。だが、少し考えればすぐに分かるように、大人の社会を構成するものが個々に異なったものであるのと同じように、大人の社会に對立する「若者」も個々に異なった相貌を持っているはずだ。それをいっしょくたに「僕たちへ社会の糞へに

属する者」と言ってしまうのは、図式的で感傷的・観念的な二項対立でしかない。

僕は、自分のセンチメンタルな社会への反感を、二人の心中未遂業に投影しているにすぎない。隆男たちが死んだことを知ったときの、

僕は涙を流していた……二人の反抗的な職業に賭した僕自身の社会への抵抗がもろくも崩れ去ったことを悲しむのか。（「遠い夏」）

「僕たちには何もないんだ……。何もできやしないんだ……」僕はただ涙を流した。（「遠い夏」）
という言葉がそれを端的に示している。僕は、二人の心中未遂業に投影していた自己の社会への反感が、二人の死によって挫折したことを悲しんでいる。だが、こうした描き方はいかにも図式的すぎるだろう。

「隆男と美津子」では、こうした観念的な二項対立ではなく、二人の死に対する僕の驚きは、僕と隆男たちとのミゾを暗示する。だが、この段階では二人の死は僕の心の奥底に突き刺さるような衝撃を与えてはいない。僕にとって二人の死は不可解ではあったが、彼らの行動は心中未遂業だと理解していたのに、その理解に反して死んでしまったことへの不可解さであって、僕の心を揺さぶってはいない。

隆男と美津子が死んだ、なぜ？ 致死量の三倍もの睡眠薬をのんで、なぜ？ 答えの出ない問いが脳細胞のひだを駆けめぐる。涙がゆっくりとにじみだし、瞳を被った。（「隆男と美津子」）

十八歳の隆男と美津子。青春を生きる年ごろの僕たち。若い隆男。なぜ？ 隆男たちは致死量の三倍も
のんで死んだのか、まだ若いのに？（「隆男と美津子」）

僕は自分が持つ悲しみを理解できなかった。女の子のように、それも思春期のロマンチックな感傷にぬりたくられた女の子のように、僕は涙を流している。死んだってどうという事のないと思っ

だったことは、僕にも分かった。だが、本当に死んだという事は、分からない。（「隆男と美津子」）

「思春期のロマンチックな感傷にぬりたくられた女の子のように、僕は涙を流している」というところに、その僕の「悲しみ」の質が示されているといえよう。

だが、そうして悲しんでいる「僕」に追いつちをかけるようにして、手帳に僕のニックネームと電話番号が記されていたことが告げられる。それは、思春期の女の子の感傷のような甘い悲しみに冷や水をあびせかけるような衝撃を与えたはずだ。

ま新しい手帳に自分のニックネームと電話番号だけが書いてあるのをみて、僕は「信じられない……」と衝撃を受ける。言葉が一義的であることを前提とするならば、僕が隆男から聞いていた心中未遂業の要領と、手帳のはたす役割からして、隆男たちは僕を「助平などこかの重役」と同じようにカモにしようとしていたことになる。

心中未遂業の要領と手帳のはたす役割を聞いた院長は「どうですか、黒いユーモアかね」という。院長は、このことをわりとストレートに受けとっている。すなわち、手帳の役割は、友達の僕に重役と同じ役回りを振りカモにしようとしたのだという解釈である。

一方、僕が、

もしこれがグロテスクなユーモアであるのなら、あの心中未遂業もこのグロテスクなユーモアを導き出すために綿密に計画された作り話でなければならない。（「隆男と美津子」）

のようにいう「グロテスクなユーモア」は、院長の解釈とは少し違う。僕を重役と同じにして負い目をおわせるということも含めて、僕を謎に追い込んでいることを指している。

同様に、「分からない」というのも院長や警察官と僕とは位相が違っている。院長室が小さいが安定した感じだったということにも暗示されているように、体制側に立つ彼らは揺るがない。今の世の中は「いい世の中」だと思っている。この現状肯定の感覚は、若者が世の中に反抗しても揺らがない。いい世の中なのに「いったい何を考えているのだ」という感覚である。それに対して、僕の「分からない」は、僕と二人の関係の根本を揺るがされたことによる分からなさなのである。

心中未遂業が話された状況を考えると、本当に経験したように見える。作り話だとすれば、隆男と美津子の意識にはずれがあるはずなのだから、うまくいかないはずだ。グロテスクなユーモアならという限定のもとに、作り話だと受けとるか。そうでなければ本当の話だと受けとるしかない。そのずれが「分からない」という謎へ僕をひきずっていく。グロテスクなユーモアという見方をつきつめていけば、そうだということになる。しかし、やはりそうだとも言い切れず、結局断定できないので分からないのである。

グロテスクなユーモアでなかったとしたら、例えば、友達としてのメッセージ、自分たちの死を僕にだけ伝えようとしたものだとも解釈することができ。作り話でなく、次の心中未遂業を計画していたが、それを実行する前にこの世と決別したともとれる。

心中へ到る経緯についても、一つには、美津子が主導して心中したとみることができ。残された手帳には、その絶望のメッセージが示されていたということになる。あるいは、隆男は僕が美津子と関係を持ったことへの復讐として、美津子は自分が送ったメッセージに気づかない僕への苛立ちから、二人で示し合わせで心中したとみることができ。もちろん、「浮気っぽい」美津子を他の男に渡さないために、隆男が無理やり心中したとすることもできるだろう。

このテキストは謎解き小説ではないので、彼らが死んだ「本当の」理由を明らかにすることはできない。読者に示されているのは、僕の目を通して語られる出来事と、隆男の一人芝居のような語りだけである。三谷邦明が「一人称的言説は、事実と虚構との差異を言説の上に出示することができない」と論じているように（注五）、隆男によって語られる、この心中未遂業の体験が本当かどうかを明らかにすることはできない。読者は、それらが僕にとってどんな意味を持っていたかを問うことしかできないのである。三谷邦明は、芥川龍之介の小説「藪の中」を論じる中で、三つの相反する私語りの扱い方について、

小説の中での、一人称／過去の言説は、小説内事実であり、三人の齟齬している事実を統率する視点はないのである。しかし、へ語ることへに注視すると、このテキストが描いている主題群が新たに浮上し、各私語りの多義的で重層した構造が明晰化されてくる。一人称／過去の言説を、最高に利用した小説がここに誕生したのである。このテキストは、私語りという一人称／過去言説の饗宴なのである。（注六）と論じている。推理小説のように犯人探しをするという、語られている事柄にとらわれた読みをするのではなく、どのように語られているかという「語ること」に着目することによって「語り」の多義的で重層した構造がみえてくる。「隆男と美津子」において、僕という登場人物の視点に密着して読むことを離れ、「語り」のシステムに着目するならば、そこに虚と実の曖昧な境界を彷徨する僕の姿が浮かび上がってくるのである。

V

心中未遂業の話が本当だったかどうかということは、実はあまり大きな問題ではない。隆男と美津子が、心中未遂業の話をして、手帳の役割を僕に教えたうえで、僕のニックネームと電話番号を書いた手帳を残し

て二人で死ぬ。美津子と関係を持ったことのある僕は二人の心中に負い目を感じざるをえない。しかし、二人が死んでしまえばもうつぐないようがない。いつまでもひきずっていかねばならない。このいつまでも二人のことをひきずっていかざるをえないところに、僕が追い込まれていることが重要なのである。

「遠い夏」では、僕は彼らとは別の世界に意識している。それでいて自分のセンチメンタルな社会への反抗を、二人の心中未遂業に投影している。が、それが裏切られた、というのが「遠い夏」のストーリー展開である。

「隆男と美津子」では、僕は彼らとは別の世界に意識していない。親友であり、ボスであり理解者であると思っている。しかし、意識しないところで別のところにいる。美津子のメッセージにも気づかない。そして、二人の死によって、実は分かっていたことに気づかされる。二人が了解しがたい他者として、しかし、切っても切り離せない存在として心の中に住みついてしまった、という話になるのである。

この事件の前、僕は隆男たちから「ボス」と呼ばれ、詰問したり、相談されたりと、理解者的な立場で、どちらかといえば優位に立っていた。しかし、この事件の後、負い目を感じていることもあり、その立場は一転して劣位になる。僕は二人の死について謎をひきずっていく。いろいろと推測はできるが、これが正解だと自分を納得させることはついにはできないだろう。決定打がないから、考えるのをやめるか、考え続けるしかないのである。僕は、その負い目を背負っていきいかねばならない。それが隆男と美津子の残したメッセージなのである。

分かったような気持ちでいたから仲間だと思っていたというレベルから、心の中から切り離せないというレベルへ転位した。二人は僕の心の中で謎として生き続ける。それは、仲間以上の仲間といえるだろう。

このように考えてきた読みを踏まえて、このテキストを読むための五つ目の課題として、

⑤ この事件の前後で、僕の中での二人の存在はどのように変わったか、考えてみよう。

という課題を設定することができるだろう。

VI

このようにしてみると、このテキストは、言葉の二重性に気づかなかった主人公が、言葉の多義性にとりこめられた話とみなすことができる。

この世はものごとを一義的にとらえようとする言説に満ちている。しかし、一義的な言説だけではこの世は姿をあらわしてこない。そこに見えるのは、薄っぺらでのっぺらぼうな世界でしかない。この世を多義的なものとして見ようとすれば、物事の生々しさが出てくるが、逆にどうとらえて、心を片付けたらいいか分からなくなってしまう。その時に、まわりの世界や他者が、了解しがたい他者としてたちあらわれてくるのである。

注

(一) 国語教育の研究サークル「みんなで国語の教科書を読む会」の活動として、現行の教科書に収められていない作品を教材として発掘するという作業をおこなった。「隆男と美津子」はその活動の中

で紹介され、主に吉野がその読解や課題作りのレポートを担当した。本稿をなすにあたっては、その際の討論や助言に学ぶところが多かった。ご助言を賜った伊豆利彦先生・石垣義昭氏・須貝千里氏・松本議生氏に深謝する。その後、このテキストについては、石垣義昭氏が、日本文学協会国語教育部会第五十一回夏期研究集会において、武蔵工業大学付属高校における授業実践をもとに研究発表をおこなっている。「みんなで国語の教科書を読む会」においても、石垣氏より、その発表に使用する資料（武蔵工業大学付属高校生徒の感想文）が紹介されたが、本稿ではその資料については取りあげなかった。

(二) 『中上健次全集』一（集英社 一九九五年八月二十三日）解説。

(三) 雑誌『文學界』（二〇〇二年五月号）

(四) 生徒の感想文は、神奈川県立汲沢高等学校における一九九九年年度三年生の現代文の授業におけるものである。なお、生徒の感想文はすべて原文のままとした。

(五) (六) 三谷邦明「物語の語りと近代小説——『藪の中』を読むあるいは一人称語りの饗宴——」（『文

学』季刊第9号・2号 一九九八年春）